そのとき医療現場は・・・

498.89/I R10666

そのとき、地域病院は野戦病院と化した

簡易ベッドで埋め尽くされた待合室、廊下にあふれる被災者、家族の安否もわからないまま不眠不休の極限状態で働く医療従事者の姿――3月11日以降、連日テレビなどでこの病院の様子が報道されました。

なぜ石巻赤十字病院がこれほどクローズアップされたかというと、約20万人が居住する石巻圏の医療施設がほぼ壊滅状態となり、唯一、水没を免れ、自家発電機を所有していたこの病院に人々が殺到したためです。

また、石巻市役所が浸水のため孤立、一時は300か所にまで膨れあがった避難所への医療提供やアセスメント(評価付け)も医師自らが担いました。結果的に救えない命も少なくはありませんでしたが、それを最小限に留める努力を、赤十字の組織力と機動力をもって全力で行ったこの病院の取り組みは、今後の災害時救急医療のモデルケースになるともいわれています。

かつてない規模で行われた過酷なトリアージ、津波被害特有の“低体温症”患者への対応、避難所の劣悪な環境が引き起こした肺炎――石巻赤十字病院が体験した死闘の100日間を追い、そこで生まれた様々な人間ドラマと交差させながら、今後の災害時救急医療の生きた教訓となるノンフィクションです。

408/B/1758 R10672 ・ 498.89/I R11101

東日本大震災で最大の犠牲者を出した石巻市は行政や医療機関も機能がマヒし、「石巻医療圏」22万人の命は宮城県災害医療コーディネーターである著者に託された。状況不明の避難所300ヵ所、いつまでも減らない大量の急患数…かつてない巨大災害に、空前の大組織「石巻圏合同救護チーム」を指揮して立ち向かい、地域の医療崩壊を救った一外科医の思考と決断のすべて。

日経メディカル
http://bizboard.nikkeibp.co.jp/academic/index.html

2011年4月号 緊急特集 東日本大震災
・大災害で医療はどう動いたか
3月11日、国内史上最大の地震が三陸沖で発生、津波が太平洋沿岸部に甚大なダメージをもたらし、各地の医療提供体制も崩壊した。原発被害も続く中、多くの医療者が被災地の医療再建に尽力する。一方で、被災者が全国に避難する動きが活発化。大地震の余波は、被災地以外にも及び始めた。

2011年5月号 特集 ルポ 東日本大震災
・奮闘する医療現場
東日本大震災の発生から約2カ月がたった。甚大な被害を受けた三陸沿岸部の各地には、多くの医療支援チームが参集。そのかいあって、避難所での医療提供体制はかなり整ってきた。被害の度合いや復旧の進捗状況は各地で異なり、復興まで長く厳しい闘いが続くが、多くの医師が現場で日々奮闘している。

2012年3月号 特集 震災医療 成果と反省
東日本大震災の発生から1年がたつ。被災地もだいぶ落ち着きを取り戻した。だが、震災の影響は依然として残る。災害関連疾患の実態や医療支援の反省点、医療復旧の現状を総括するとともに、今も現場で奮闘する医師たちの声を聞いた。

そのとき医療現場は・・・

498.89/Kyo R12063 R12064

本記録誌は，被災地では今もなお復興に向けた取り組みが行われている中で，「岩手県医師会の震災対応と被災地支援活動の全てを記録し，後世に伝えること」「今後起こり得る災害時にも役立ててもらうこと」を目的として発刊されたものである．

記録誌は，「本編」と「資料編」の二部構成となっている．
「本編」では，被災地支援に実際に関わった医師のコラム等を交えながら，「発災期」では被災地への医療支援や検案に取り組んだこと，日医等からの医薬品支援等を，「急性期」では，各地域から支援に来てもらったJMATの調整，プレハブの仮設診療所の建設，支援チームの広範囲にわたる被災地をカバーし，隙間のない医療体制を構築するために立ち上げた「いわて災害医療支援ネットワーク」の活動等をそれぞれ紹介．更に，「復興期」では，岩手県医として開設・運営する陸前高田市の高田診療所の取り組みや放射能対策，子どもの心のケア対策などについて，「未来へ」では，今回の大規模災害を踏まえた新たな取り組みとして，災害時の透析医療情報ネットワークの構築や子どもたちの心を長期間にわたってケアできる体制の整備等について触れられている．
その他，各章の終わりには，各時期の活動の検証を行った上で，「医師会・行政・大学の連携による早い段階からの体制づくり」「被災地目線に立った効率的な支援調整の仕組みづくり」「長期的な支援を見据えた支援」の重要性が指摘されている．

そのとき薬剤師は・・・

日経ドラッグインフォメーション 2011年5月号
http://bizboard.nikkeibp.co.jp/academic/index.html

特集 実録 東日本大震災
・被災地で奮闘する薬剤師たち

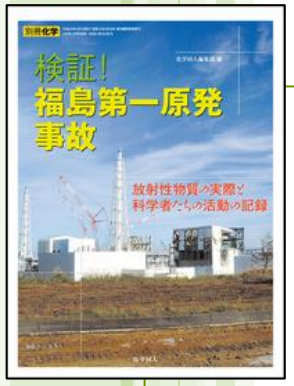
東日本大震災の発生直後から現在に至るまで、一人でも多くの命を救うため、そして被災した一人ひとりの健康を維持するために、数多くの医療従事者が力を尽くしている。薬剤師も、薬の専門家として、医療チームで重要な役割を果たしている。
被災地には、自ら被災した薬剤師もいれば、全国各地から支援に駆けつけた薬剤師もいる。この未曾有の大災害に際して、薬剤師は何をし、どんなことを感じたのか。支援にあたった薬剤師たちの声を集めた。

調剤と情報 2011年9月臨時増刊号

未曾有の大震災を経験し、薬剤業務や医療体制には さまざまな問題が立ちはだかりました
インフラの断絶、流通、環境が整わない非常時での薬剤師活動を見直すきっかけに…

東日本大震災の被災地に派遣された医療チームの活躍が報告されるなか、多くの薬剤師が各地で活動にあたり、他職種からもその役割の重要性が認められています。
『調剤と情報』2011年臨時増刊号では、非常時に役立つ情報や知識、スキルを紹介。また、災害時の医療体制に関する基本的知識を解説するほか、薬剤師会や製薬団体、企業の活動記録などで構成します。いざという時に備え、手元に置いておくと役立つ1冊です。

福島原子力発電所事故



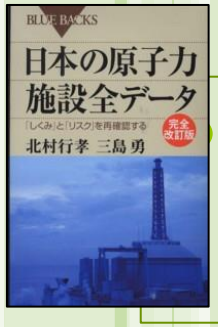
543.49/Ke　R11002

福島第一原発事故によって放出された放射性物質が環境へ及ぼした影響とは．また事故発生後，科学者たちは福島でどのような活動を展開したか．およそ1年が経過したいま，あらためて原発事故を検証する．

Part1　福島第一原発は今どうなっているか
Part2　環境中における放射性物質の動きを追う
Part3　奮闘する科学者たち―現場を駆ける！Part4　あらためて福島原発事故を問う（福島原発事故　残された課題）

Newton　2011年7月号

きちんと知りたい　原発と放射能
■第1章　続報―福島第一原発事故
発熱がつづく燃料棒，増加する汚染水。さまざまな問題にどう対処するのか
■第2章　放射能のリスクを考える
被曝の影響はどこまでわかっているのか？
■第3章　原子力とは何か？
エネルギーを取りだすしくみとは？放射性廃棄物はどう処理される？



408/B/1759　R10673

炉のタイプ、出力、所在地、建設費、主なトラブル、海抜・海岸からの距離、業務内容…。「どこに何があり、何をしているのか」がすべてわかる。原発から燃料加工・再処理施設、大学や企業が持つ研究炉まで、数ある原子力施設の全貌を知る―。原子炉全54基＋関連施設を網羅した「読むデータブック」。

081/I/1322　R10515

全世界に衝撃を与えた福島第一原発のメルトダウン事故。発生直後から現地取材を重ねてきた著者が、地元住民、事故処理に携わる作業員、避難した人びと、放射能の不安のなかで暮らす子どもたちの声を、克明に報告する。政府・東京電力は何を隠したのか。チェルノブイリ事故からいま学ぶべき教訓とは何か。写真多数。

081/I/1515　R11959

科学の粋を集めたはずの原子力産業。しかし、そこでは地震学の最新の科学的知見が活かされなかった。地震学の進化過程において、その後のプレートテクニクス理論導入において、どのような議論で「補強せず」の方針が採られたのか、科学ジャーナリストが詳細に明かす。そして今、新基準による判定がその反省に立脚しているのか、真摯に問う。

081/I/1357　R10987

村に放射能が降った。浜の避難者を懸命に受け入れた人々への全村避難指示、不安と混乱。家を牛を、豊かな土を、丹精込めた村を捨てるのか。世界中が注視するなか、役場の奮闘、若者の発信、女たちのがんばり、諦めない人々の長いたたかいが始まる。寄り添ってきた研究者が様々な村民の声を拾い、未来のために報告する。

地震・津波の科学的考察

408/B/1767　R11014

2011年3月11日に東北を襲った巨大津波は、生き残った動植物の生息地をも激変させた。死滅するカエルの卵、真夏に枯れゆく木々、姿を消した絶滅危惧種のトンボたち…。しかし津波の影響がかつてない規模になったのは人間による隙間のない土地利用が原因だった。「復興」の名のもと、急速に進む土木事業は本当に東北の「豊かな自然」を回復できるのか。震災直後から生きものたちの消息を追って東北全域を奔走した著者が問う「真の復興とは」。

408/B/1924　R12285

広大な海をわたる波には、2つの種類がある。「海底を感じる波」と、「海底を感じない波」だ。時速700kmもの猛スピードで進む津波は、つねに海底を感じている。南極近海で生まれ、アメリカ西海岸へと到達する「うねり」は、海底を感じることなく1万kmもの長旅をこなす。波が海底を感じるとはどういうことか？波のふるまいを左右する「波長」と「水深」のフクザツな関係とは？身近なふしぎ現象を、数式なしでわかりやすく解き明かす。

Newton　2011年6月号

未曾有の大震災　M9地震、津波、原発事故

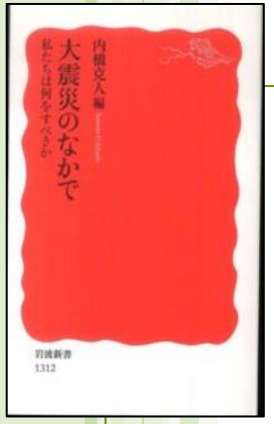
超巨大地震はこうしておきた
・東北地方太平洋沖地震とその津波のメカニズムにせまる
徹底分析 福島第一原発事故
・なぜ放射性物質が流出したのか? その影響は?
次にひかえる超巨大地震
・日本がこれから直面する大きな危機とは?

日経サイエンス　2011年6月号
http://bizboard.nikkeibp.co.jp/academic/index.html

特集：マグニチュード9.0の衝撃

地震学
・東日本大震災 鳴らされていた警鐘
古地震
・国史が語る千年前の大地動乱
原発事故
・科学者の思考停止が惨事を生んだ
原発事故
・予測できない放射線リスク
Q&A
・余震はいつ止むのか？
地震学
・揺れる前に警報 緊急地震速報システム
心理学
・立ち直る力のメカニズム
心理学
・回復力だけには頼れない

震災の記録 ・ 復興へ向けて



081/I/1312 R10407

この大震災は，何を問いかけているのか．大きな悲しみや苦しみ，喪失感のなかで新しい歩みを始めてゆかねばならない被災者・被災地に，私たちはどう向き合い，これからどんな支援をしていったらよいのだろうか．現地で活動を続ける医師やボランティアをはじめ，作家や学者ら33名がそれぞれの思いと考えをつづる．

081/I/1343 R10630

届かない警報、つながらない電話、公式発表を繰り返す大手メディア…。震災発生後、私たちは二種類の情報空白に遭遇した。危機を生きるために必要な情報と知識は何か。そして有効な情報手段は何か。国内外の各種メディア・研究機関、インターネット上の情報を追跡し、2011年3月11日東日本大震災発生からの六ヶ月を検証する。

081/I/1355 R10716

途方もない被害をもたらした東日本大震災は、歴史上類をみない「複合災害」だった。地震と大津波、そして福島第一原発事故が折り重なる中で、人びとは何を思い、どんな経験をしたのか。そこから何を教訓として引き出すべきか。被災地に通い続ける著者が現地のルポをまじえながら、3・11全体の輪郭を描き、残された課題を考える。

081/I/1412 R11316

東京で大震災に遭遇した著者は、地域誌『谷根千』での経験や関東大震災直後の記録を読んでいたことから、新聞・テレビ報道ではなかなか出てこない人々の生の声を記録することが大切だと考え、ホームページなどで発信を続けてきた。本書はそれらに加筆して、文化財を含む東北各地の被災状況を小所低所からリアルタイムで伝える貴重な日録。

081/I/1518 R12006

災害復興においては、その長い過程で新たな問題が生じ、被災者を悩ます。そして、災害常襲国である日本の備えはまだまだ貧弱だ。阪神・淡路大震災から二〇年。その痛恨の教訓は生かされず、今また「復興」の名のもとにもたらされる災害が東北を覆っている。次の復興災害をどう防ぐのか、多くの災害現場を見てきた著者が提言。